井相田C遺跡8

－井相田C遺跡第９次調査報告－

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第1178集

２０１３

福 岡 市 教 育 委 員 会

井相田C遺跡 8

－井相田C遺跡第９次調査報告－

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第1178集

調査番号　1040
遺跡略号　ISC―9

2013

福岡市教育委員会

序

福岡市には、豊かな自然と、文化遺産がのこされています。地理的位置から、古くから対外交渉の拠点の一つとして大きな役割を担ってきました。

これら先人の遺産を保護し未来へと伝えていくことは、私たちの重要な務めです。

福岡市教育委員会では、開発によってやむを得ず失われていく埋蔵文化財について、事前に発掘調査を実施し、記録の保存、出土遺物などの活用に努めています。

本書は、共同住宅建設に伴い、平成23年２月から３月にかけて発掘調査を実施した博多区井相田Ｃ遺跡の第９次調査の成果を報告するものです。この調査では古墳時代から古代にかけての集落が確認されました。

本書が文化財に対する認識と理解を深めていく上で広く活用されますとともに、学術研究の分野で役立つことができれば幸いです。

発掘調査から本書の刊行に至るまで、多くの方々のご理解とご協力を賜りましたことに対し、こころから感謝の意を表する次第です。

平成25年３月22日

福岡市教育委員会

教育長　酒　井　龍　彦

例　　言

1．本書は福岡市教育委員会が共同住宅建設に伴い、福岡市博多区井相田二丁目４番４、４番17で発掘調査を実施した井相田Ｃ遺跡第９次調査の報告である。

1．本書で報告する調査の細目は下表のとおりである。

調 査 番 号	遺 跡 略 号	調査対象面積	調 査 面 積	調 査 期 間
1040	ＩＳＣ－９	458㎡	496.2㎡	2011年２月７日～３月25日

1．本書に掲載した遺構の写真撮影・実測は佐藤一郎（埋蔵文化財第２課主任文化財主事）が行った。

1．遺物の写真撮影は佐藤、実測・製図は土器を佐藤、石製品は技能員の立石真二、遺構の一部は長浦芙美子が行った。

1．遺物の整理は整理補助員の古賀美江・小畑貴子・鶴田靖子が行った。

1．本書に用いた方位は座標北である。

1．遺構は２桁の通し番号を用い、遺構の種類に応じてSB（掘立柱建物等）、SD（溝）の略号を番号の前につけた。

1．本書に関わる図面、写真、遺物など一切の資料は、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵、保管される予定である。

1．本書の執筆、編集は佐藤が行った。

本 文 目 次

Ⅰ　はじめに…… 5
　1　調査に至る経緯…… 5
　2　調査の組織…… 5
Ⅱ　遺跡の位置と周辺の歴史環境…… 7
Ⅲ　調査の記録…… 9
　1　調査の概要…… 9
　2　遺構と遺物…… 9
　検出遺構
　⑴　掘立柱建物…… 11
　⑵　溝…… 11
　出土遺物…… 13
Ⅳ　小結…… 20

挿 図 目 次

第１図 井相田Ｃ遺跡の位置と周辺の遺跡（縮尺 1/25000）…… 6
第２図 井相田Ｃ遺跡周辺図（縮尺 1/5000）…… 8
第３図 井相田Ｃ遺跡第９次調査発掘地（縮尺 1/200）…… 10
第４図 調査区土層図（縮尺 1/60）…… 12
第５図 井相田Ｃ遺跡第９次調査遺構配置図（縮尺 1/150）…… 14
第６図 掘立柱建物実測図（1）（縮尺 1/60）…… 15
第７図 掘立柱建物実測図（2）（縮尺 1/60）…… 16
第８図 溝土層断面実測図（縮尺 1/40）…… 16
第９図 出土土器実測図（縮尺 1/3）…… 18
第10図 包含層出土土器・石製品実測図（縮尺 1/3・1/4・1/2）…… 19

図 版 目 次

図版 1　1．井相田Ｃ遺跡第９次調査全景（北東から）　2．ＳＢ01掘立柱建物（南東から）
図版 2　1．ＳＤ01（南から）　2．ＳＤ02（南から）
3．ＳＤ02発掘風景（北西から）
図版 3　1．ＳＤ01木杭１（北から）　2．Pit11（東から）
3．ＳＢ01（北東から）　4．調査区北張出部（北東から）
図版 4　1．ＳＤ01土層（南から）　2．ＳＤ01土器出土状況（南から）
3．ＳＤ02土層（南から）　4．ＳＤ02土器出土状況（南から）
5．井相田Ｃ遺跡第９次調査南壁面土層（北から）　6．井相田Ｃ遺跡第９次調査南壁面土層（北から）
図版 5　出土遺物

表 目 次

第１表 井相田C・仲島遺跡発掘調査一覧表…… 6

ＳＤ02発掘風景（北東から）

Ⅰ　は　じ　め　に

１　調査に至る経緯

2010年10月１日付けで個人から福岡市埋蔵文化財第１課に福岡市博多区井相田二丁目４番４、４番17の共同住宅建築に伴う埋蔵文化財事前調査申請書（22－２－620）が提出された。申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地である井相田Ｃ遺跡内に位置し、確認調査が必要であるが、当該地は過去の申請（62－12－336）により確認調査が行われ、現地表面から約1.3mの深さで遺構が確認されており、確認調査の結果とRC造９階建ての建物の基礎設計図を照合したところ、計画されている建物基礎では遺跡の破壊が免れないため、やむを得ず建設に先立ち記録保存のための発掘調査を行うことで合意した。協議を重ねた結果、2011年２月７日から３月25日までの期間で調査を行った。調査期間中は施工の美里建設株式会社からユニットハウスやトイレ、水道、電気等の協力を得た。

２　調査の組織

発掘調査受託

福岡市

発掘調査（平成22年度）

福岡市教育委員会文化財部

埋蔵文化財第１課

課　長　濱石哲也

事前審査係長　宮井善朗

事前審査係　加藤良彦（主任文化財主事）

木下　博文（文化財主事）

埋蔵文化財第２課

課　長　田中壽夫

調査第１係長　米倉　秀紀

発掘調査　佐藤一郎（主任文化財主事）

資料整理（平成24年度）

福岡市経済観光文化局文化財部

埋蔵文化財審査課

課　長　米倉秀紀

事前審査係長　加藤良彦

資料整理　佐藤一郎（主任文化財主事）

埋蔵文化財調査課

課　長　宮井　善朗

調査第１係長　常松　幹雄

試掘調査は昭和62年に埋蔵文化財課事前審査担当 米倉秀紀、大庭康時が行った。

調査・整理の庶務は文化財部埋蔵文化財第１課課管理係（平成22年度）の井上幸江・埋蔵文化財審査課管理係（平成24年度）の川村啓子が行った。

発掘作業員

安東昌信、岩崎良隆、原勝輝、内野信代、兼田ミヤコ、桑原美津子、古賀幸子、芹川淳子、尊田絹代、高手與志子、徳山孝恵、濱地静子、本郷満子、村山巳代子、結城フジコ

整理作業

古賀美江・小畑貴子・鶴田靖子

また、施工の美里建設株式会社、地元井相田二丁目町内、発掘作業員、整理作業員の方々のご協力により、井相田Ｃ遺跡第９次発掘調査、報告書作成にまで至ることができたことに対し心から謝意を表する。

1. 井相田Ｃ遺跡　2. 比恵遺跡群　3. 那珂遺跡群　4. 雀居遺跡　5. 那珂君休遺跡
6. 板付遺跡　7. 高畑遺跡　8. 諸岡Ａ遺跡　9. 諸岡Ｂ遺跡　10. 五十川遺跡
11. 井尻Ｂ遺跡　12. 笹原遺跡　13. 三筑遺跡　14. 麦野Ａ遺跡　15. 麦野Ｂ遺跡

第１図　井相田Ｃ遺跡の位置と周辺の遺跡

Ⅱ　遺跡の位置と周辺の歴史環境

井相田Ｃ遺跡は、福岡平野の東辺を南北に貫流する御笠川中流域左岸の低位段丘面に立地している。井相田遺跡群が立地する微高地は開析谷や自然流路によって分断され、それぞれ南から井相田Ｂ遺跡、井相田Ａ遺跡、Ｃ遺跡、Ｄ遺跡と呼称している。本調査地は井相田Ｃ遺跡の南東部に位置し、本調査地の北側隣接地で仲島遺跡第２次調査が行われている。

過去の報告でふれられているように、大野城市との市境に接する一帯で遺跡名と発掘調査次数に混乱が生じている。1978年から大野城市仲島２丁目と隣接する福岡市博多区井相田１丁目から２丁目にかけての土地で開発に伴い試掘調査が行われ、遺跡が確認された。大野城市側では「仲島遺跡」としてすでに周知化されており、福岡市では仲島遺跡として大野城市とは別個の調査次数を設け、1984年までに３次にわたる調査がなされた。1984年７月に井相田２丁目の麦野丘陵に接する沖積地において、工場建設に伴う事前調査で遺跡が確認され、「井相田Ｃ遺跡」として登録された。その後も数次にわたって発掘調査が行われ、遺跡の広がりは北東に延びて仲島遺跡と連続することが確認された。

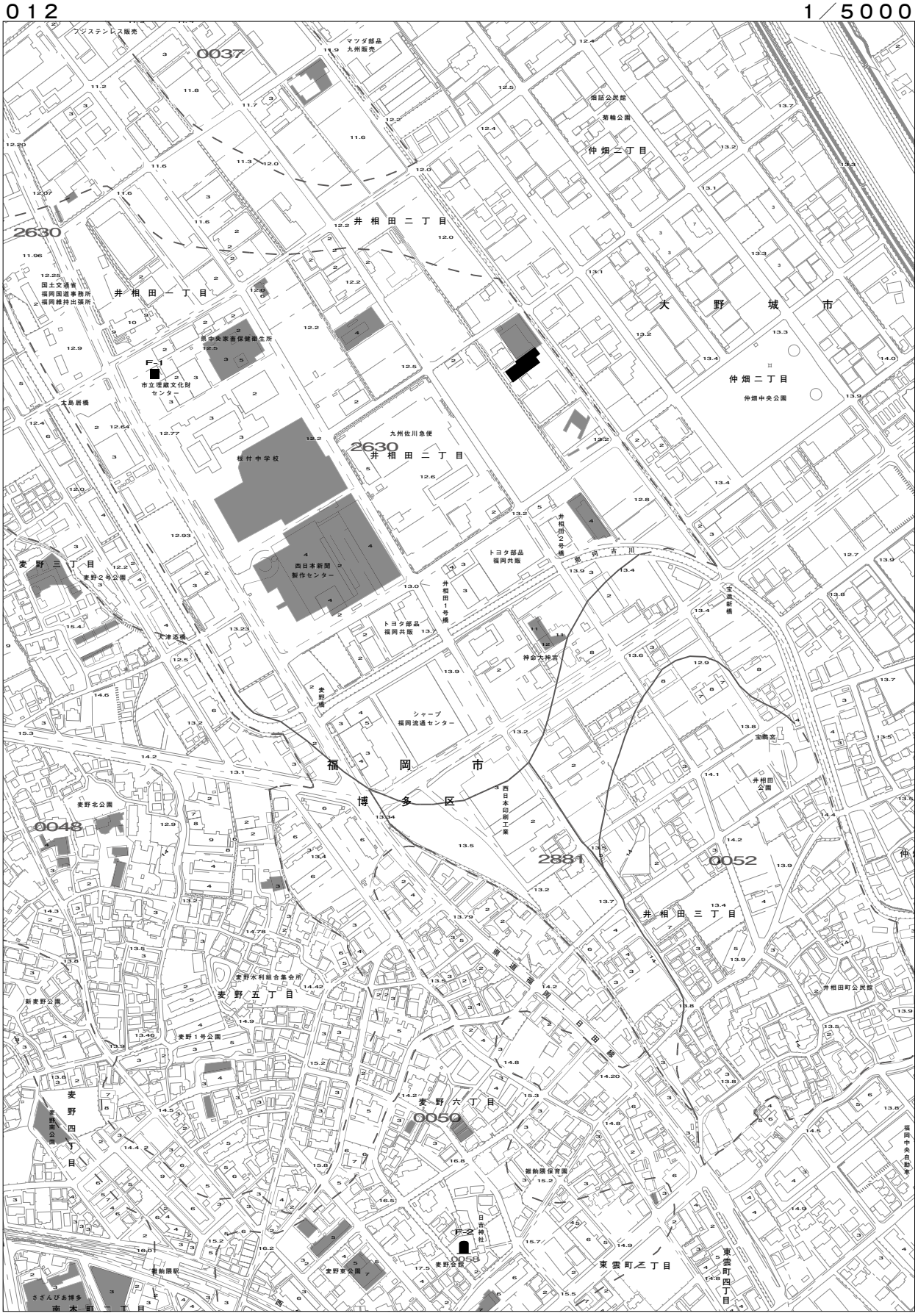
1996年改訂の福岡市文化財分布地図では福岡市側の仲島遺跡は井相田１丁目地内に限定し、井相田２丁目地内の遺跡はすべて井相田Ｃ遺跡とされた。従って、仲島遺跡第１・２次調査は井相田Ｃ遺跡に含まれることとなったが、調査次数の訂正は行われていない。

井相田Ｃ遺跡ではこれまで10次の調査が行われ、12世紀後半～13世紀の水田跡、８世紀前半～平安初期の集落跡、遺跡の北辺では弥生時代前期の生活遺構が検出されている。第１･10次調査では水城東門から延びる官道跡の一部が検出されている。

遺跡名	次数	調査番号	所在地	調査面積(㎡)	調査期間	報告書	調査原因
井相田Ｃ遺跡	1	8512	井相田２丁目１－60	12,000.0	1985.５.27～12.27	152	工場
井相田Ｃ遺跡	2	8625	井相田２丁目１－26外	11,000.0	1986.７.１～1987.１.24	179	学校
井相田C遺跡	3	8926	井相田２丁目２－６	650.0	1989.６.23～９.５	658	共同住宅
井相田C遺跡	4	9539	井相田２丁目１－62	2,249.0	1995.11.６～1996.３.１	519	埋文センター増築
井相田C遺跡	5	9457	井相田２丁目８－３	900.0	1995.１.11～３.３	458	共同住宅
井相田C遺跡	6	0525	井相田１丁目７－５	134.0	2005.６.13～６.24	年報20	社屋
井相田C遺跡	7	0608	井相田２丁目11－３	438.9	2006.４.17～５.31	975	共同住宅
井相田C遺跡	8	0703	井相田２丁目２－17	213.2	2007.４.16～５.29	1027	共同住宅
井相田C遺跡	9	1040	井相田２丁目４－４，－17	496.2	2011.２.７～３.25	1178	共同住宅
井相田C遺跡	10	1135	井相田２丁目６－４	592.0	2011.12.12～2012.２.３	1179	共同住宅
仲島遺跡	1	7812	井相田２丁目４－６	450.0	1978.６		倉庫
仲島遺跡	2	8332	井相田２丁目1000－３	1,060.0	1983.７.４～９.11	1037	倉庫
仲島遺跡	3	8405	井相田１丁目10－２	500.0	1984.11.17～11.28		倉庫

第１表　井相田Ｃ・仲島遺跡発掘調査一覧表

012　　1／5000



第２図　井相田Ｃ遺跡発掘区域図

Ⅲ　調査の記録

１　調査の概要

発掘調査の経過

調査は共同住宅建設部分を対象とし、２月４・５日に厚さ90cmの客土を鋤取り、残土400㎡の内、200㎡は外部に搬出、残りは南西側に置くこととし、両日とも始業時と終業時に立会った。

２月７日から表土剥ぎ、８日から作業員を投入し遺構検出を開始した。盛土・耕作土・床土下に灰褐色粘質土（遺物包含層）・黒色粘質土・黒灰色土（粗砂を含む）が堆積している。遺構の覆土は上面の遺物包含層とほぼ同じ灰褐色粘質土で、溝や柱穴など黒褐色粘質土上面で確認された。暗灰色粘質土層の上面（最高所で標高11.50m）は東から西側に向かって下がる緩斜面をなし、西側の約1/3を占める旧河川の落ち込みとなる。比高差は0.9mを測り、顕著な遺構は検出されなかった。写真撮影、実測など記録作成の後、３月25日に借上げた機材を返却し、埋め戻しは不要で調査を終了した。

検出された遺構は第２次調査で検出された溝の延長の他、溝８条、掘立柱建物４棟の他建物の一部とみられる柱列を検出した。溝や柱穴掘り方からは６世紀後半～末の須恵器・土師器が出土している。黄褐色粘質土層からは８世紀代の土器が出土しているが、遺構は検出されていない。

２　遺構と遺物

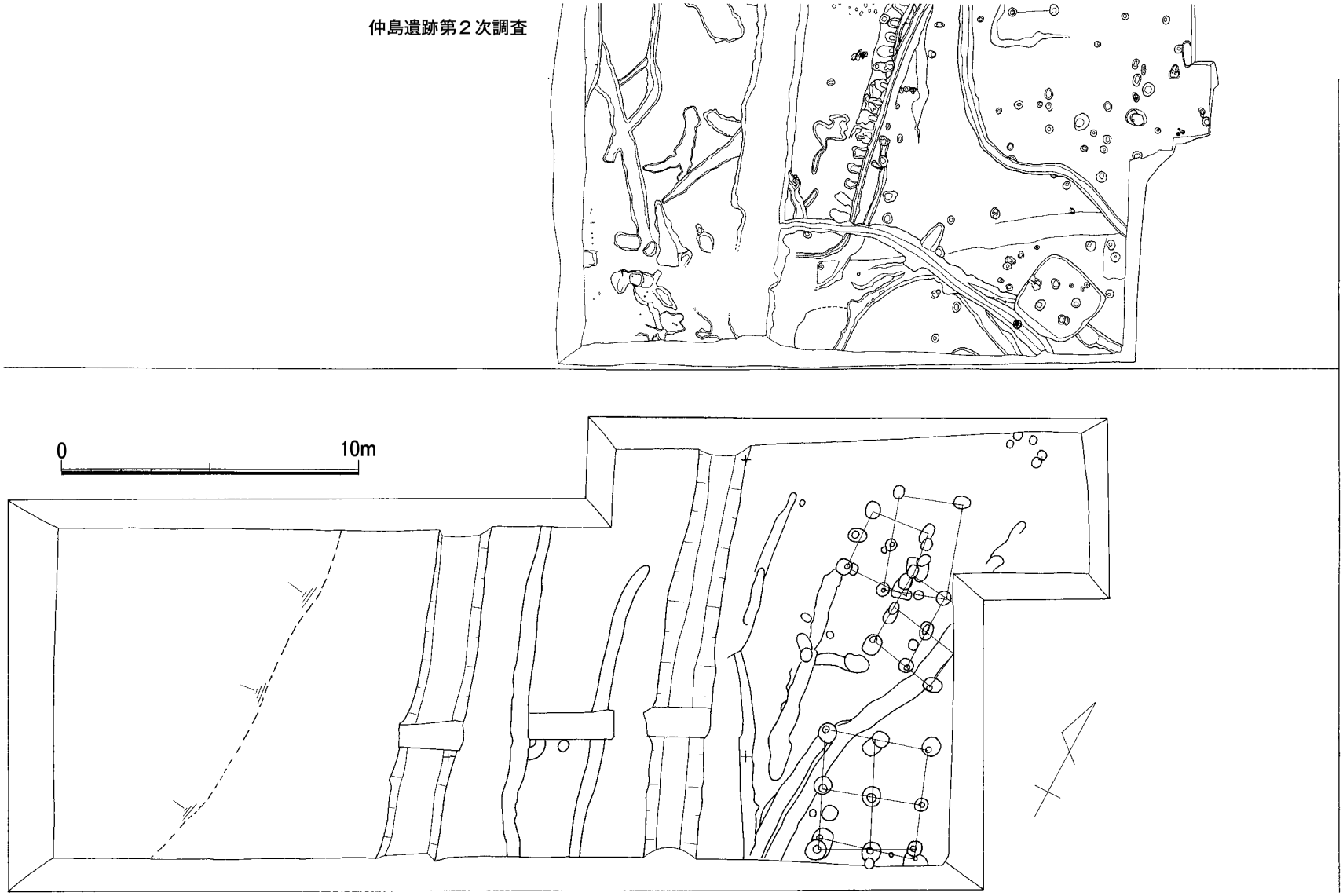
以下検出した遺構と出土した遺物について報告する。

調査区の土層（第４図）

南壁面の土層が、溝の前後関係を明確に示していることから、堆積状況について述べていく。

土色名・マンセル記号の表記は農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に拠っている。

①（１層）暗青灰色土 ５Ｂ4/1（地表から深さ．m、厚さ15㎝前後の水田耕作土）
②（２層）灰オリーブ色土（粗砂を含む）５Ｙ6/2
③（３層）にぶい褐色土（粗砂を含む 床土）7.5ＹＲ6/3
④（４層）にぶい褐色土7.5ＹＲ5/3
⑤（５層）橙色土7.5ＹＲ6/6（粗砂を含む マンガン、鉄分沈着）
⑥（６層）褐灰色土7.5ＹＲ5/1（粗砂を含む マンガン、鉄分沈着）
⑦（７～９層）溝SD02に堆積した層
　（７層）褐灰色土7.5ＹＲ5/1（粗砂・橙色土7.5ＹＲ6/6ブロックを含む）
　（８層）褐灰色土7.5ＹＲ4/1
　（９層）褐灰色粘質土7.5ＹＲ4/1
⑧（10層）褐灰色粘質土7.5ＹＲ6/1
⑨（11層）灰褐色粘質土7.5ＹＲ5/2
⑩（12～22層）溝ＳＤ01に堆積した層
　（12層）灰褐色土7.5ＹＲ4/2（粗砂を含む）
　（13層）にぶい灰褐色粘質土7.5ＹＲ6/2・灰白色砂7.5ＹＲ6/1互層
　（14層）にぶい灰褐色土7.5ＹＲ6/3（粗砂を含む）



第３図　井相田Ｃ遺跡第９次調査発掘地

（15層）にぶい灰褐色粘質土7.5ＹＲ6/2
（16層）褐灰色粘質土7.5ＹＲ6/1（マンガン、鉄分沈着）
（17層）褐灰色粘質土7.5ＹＲ6/1・灰白色砂7.5ＹＲ8/2互層
（18層）褐灰色粘質土7.5ＹＲ5/1・粗砂互層
（19層）褐灰色土7.5ＹＲ5/1（黒褐色粘質土7.5ＹＲ3/1ブロックを含む）
（20層）にぶい褐色シルト7.5ＹＲ6/3・灰白色細砂7.5ＹＲ8/2・粗砂互層
（21層）にぶい褐色シルト7.5ＹＲ6/3
（22層）褐灰色粘質土7.5ＹＲ5/1
（23層）褐灰色粘質土7.5ＹＲ4/1（明褐色土7.5ＹＲ5/8ブロックを含む）
⑪（24・25層）溝ＳＤ03に堆積した層
（24層）灰褐色土7.5ＹＲ5/2
（25層）灰褐色粘土7.5ＹＲ5/2
⑫（25層）溝ＳＤ04に堆積した層、灰褐色粘土7.5ＹＲ5/2
⑬（26層）褐灰色土7.5ＹＲ5/2（炭化物・粗砂を含む）
⑭（27層）にぶい褐色土7.5ＹＲ5/3（マンガン、鉄分沈着）
⑮（28層）黒褐色粘質土7.5ＹＲ3/1
⑯（29層）黒色土7.5ＹＲ1.7/1（地山）
⑰（30層）褐灰色土7.5ＹＲ4/1（粗砂を含む地山）

検出遺構

⑴　掘立柱建物

ＳＢ11（第６図）

調査区の北東で検出された１間×２間規模の正方形建物で柱穴堀方はいずれも平面円形を呈し、径0.6～0.7m、深さ0.3～0.6mを図る。

ＳＢ12（第６図）

調査区の東中央で検出された２間×２間以上の建物で、建物の北東が調査区外にかかる。
柱穴堀方はいずれも平面円形を呈し、径0.5～0.7m、深さ0.3～0.7mを図る。
ＳＤ08溝と重複している。

ＳＢ13（第７図）

調査区の北東で検出された１間×２間規模の長方形南北棟建物で、柱穴堀方はいずれも平面円形を呈し、径0.5～0.7m、深さ0.1～0.5mを図る。

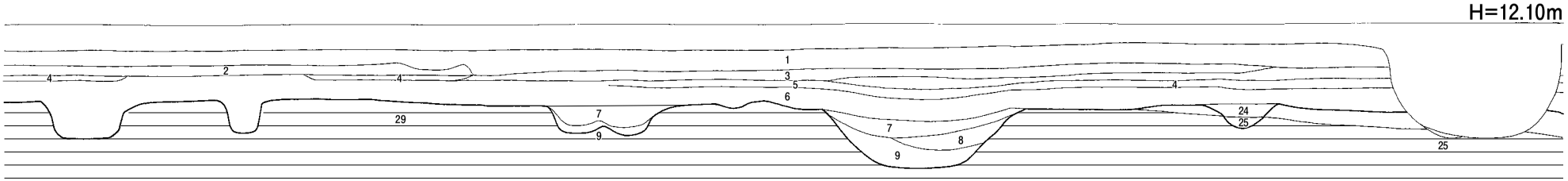
ＳＢ14（第７図）

調査区の南東で検出された２間×２間規模の正方形総柱建物で柱穴堀方はいずれも平面円形を呈し、径0.8～1.0m、深さ0.4～0.7mを図る。
柱穴の心々間の距離は概ね2.2mを測る。ＳＤ07･08溝と重複している。

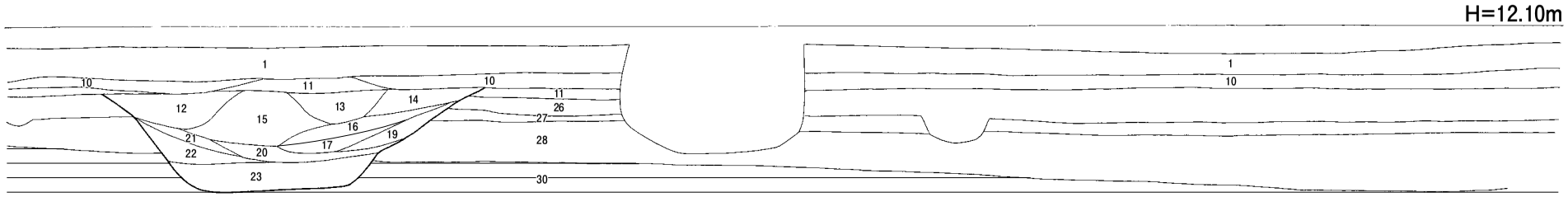
⑵　溝

ＳＤ01（第５・８図）

調査区の中央で検出された南から北方向へ走る溝で、幅1.6～1.9m、深さ0.4～0.5mを測る。溝底の標高は南端で10.65m、中央で10.6m、北端で10.5mを測り、調査区内で11.5m検出、溝底の比高差は



1．暗青灰色土 5B4/1(地表から深さ1.2m、厚さ15cm前後の水田耕作土)
2．灰オリーブ色土(粗砂を含む)5Y6/2
3．にぶい褐色土(粗砂を含む 床土)7.5YR6/3
4．にぶい褐色土7.5YR5/3
5．橙色土7.5YR6/6(粗砂を含む マンガン、鉄分沈着)
6．褐灰色土7.5YR5/1(粗砂を含む マンガン、鉄分沈着)
7．褐灰色土7.5YR5/1(粗砂・橙色土7.5YR6/6ブロックを含む)
8．褐灰色土7.5YR4/1
9．褐灰色粘質土7.5YR4/1
10．褐灰色粘質土7.5YR6/1
11．灰褐色粘質土7.5YR5/2
12．灰褐色土7.5YR4/2(粗砂を含む)
13．にぶい灰褐色粘質土7.5YR6/2・灰白色砂7.5YR6/1互層
14．にぶい灰褐色土7.5YR6/3(粗砂を含む)
15．にぶい灰褐色粘質土7.5YR6/2



16．褐灰色粘質土7.5YR6/1(マンガン、鉄分沈着)
17．褐灰色粘質土7.5YR6/1・灰白色砂7.5YR8/2互層
18．褐灰色粘質土7.5YR5/1・粗砂互層
19．褐灰色土7.5YR5/1(黒褐色粘質土7.5YR3/1ブロックを含む)
20．にぶい褐色シルト7.5YR6/3・灰白色細砂7.5YR8/2・粗砂互層
21．にぶい褐色シルト7.5YR6/3
22．褐灰色粘質土7.5YR5/1
23．褐灰色粘質土7.5YR4/1(明褐色土7.5YR5/8ブロックを含む)
24．灰褐色土7.5YR5/2
25．灰褐色粘土7.5YR5/2
26．褐灰色土7.5YR5/2(炭化物・粗砂を含む)
27．にぶい褐色土7.5YR5/3(マンガン、鉄分沈着)
28．黒褐色粘質土7.5YR3/1
29．黒色土7.5YR1.7/1(地山)
30．褐灰色土7.5YR4/1(粗砂を含む 地山)

0　2m

第４図　調査区土層図

0.15mを測る。

ＳＤ02（第５・８図）

調査区の中央部で検出された南から北方向へ走る溝で、幅1.5～1.8m、深さ0.3～0.5mを測る。溝底の標高は南端で10.85m、中央で10.8m、北端で10.7ｍを測り、調査区内で14m検出、溝底の比高差は0.15mを測る。仲島遺跡第２次調査で検出されたＳＤ06の延長である。

ＳＤ03（第５図）

調査区の中央部で検出された南から北方向へ走る溝で、幅0.3～0.5m、深さ0.05～0.2mを測る。溝底の標高は南端で11.15m、中央で11.15m、北端で11.1ｍを測り、調査区内で10m検出、溝底の比高差は0.05mを測る。

ＳＤ04（第５図）

調査区の中央部で検出された南から北方向へ走る溝で、幅0.4～0.6m、深さ0.05～0.2mを測る。溝底の標高は南端で11.05m、中央で11.05m、北端で11.0ｍを測り、調査区内で11m検出、溝底の比高差は0.05mを測る。

ＳＤ05（第５図）

調査区の中央部で検出された南から北方向へ走る溝で、幅0.3～0.4m、深さ0.2～0.25mを測る。調査区内で７ｍ検出したが、検出した範囲では溝底の比高差はみられず、標高は11.2mを測る。

ＳＤ06（第５図）

調査区の東側で検出された南から北方向へ走る溝で、幅0.35～0.6m、深さ0.15～0.2mを測る。溝底の標高は南端で11.2m、中央で11.2m、北端で11.1ｍを測り、調査区内で９ｍ検出、溝底の比高差は0.1mを測る。

ＳＤ07（第５図）

調査区の東側で検出された南から北方向へ走る溝で、幅0.35～0.5m、深さ0.1～0.25mを測る。調査区内で５ｍ検出したが、検出した範囲では溝底の比高差はみられず、標高は11.1mを測る。

ＳＤ08（第５図）

調査区の東側で検出された南から北方向へ蛇行しながら走る溝で、幅0.45～0.65m、深さ0.25～0.5mを測る。溝底の標高は南端で11.15m、中央で11.0m、北端で10.7ｍを測り、調査区内で10m検出、溝底の比高差は0.45mを測る。

ＳＤ09（第５図）

調査区の東側で検出された東西方向に走る短い溝で、幅0.35～0.45m、深さ0.03～0.08mを測る。溝底の標高は東端で11.25m、西端で11.35mを測り、調査区内で２ｍ検出、溝底の比高差は0.1mを測る。

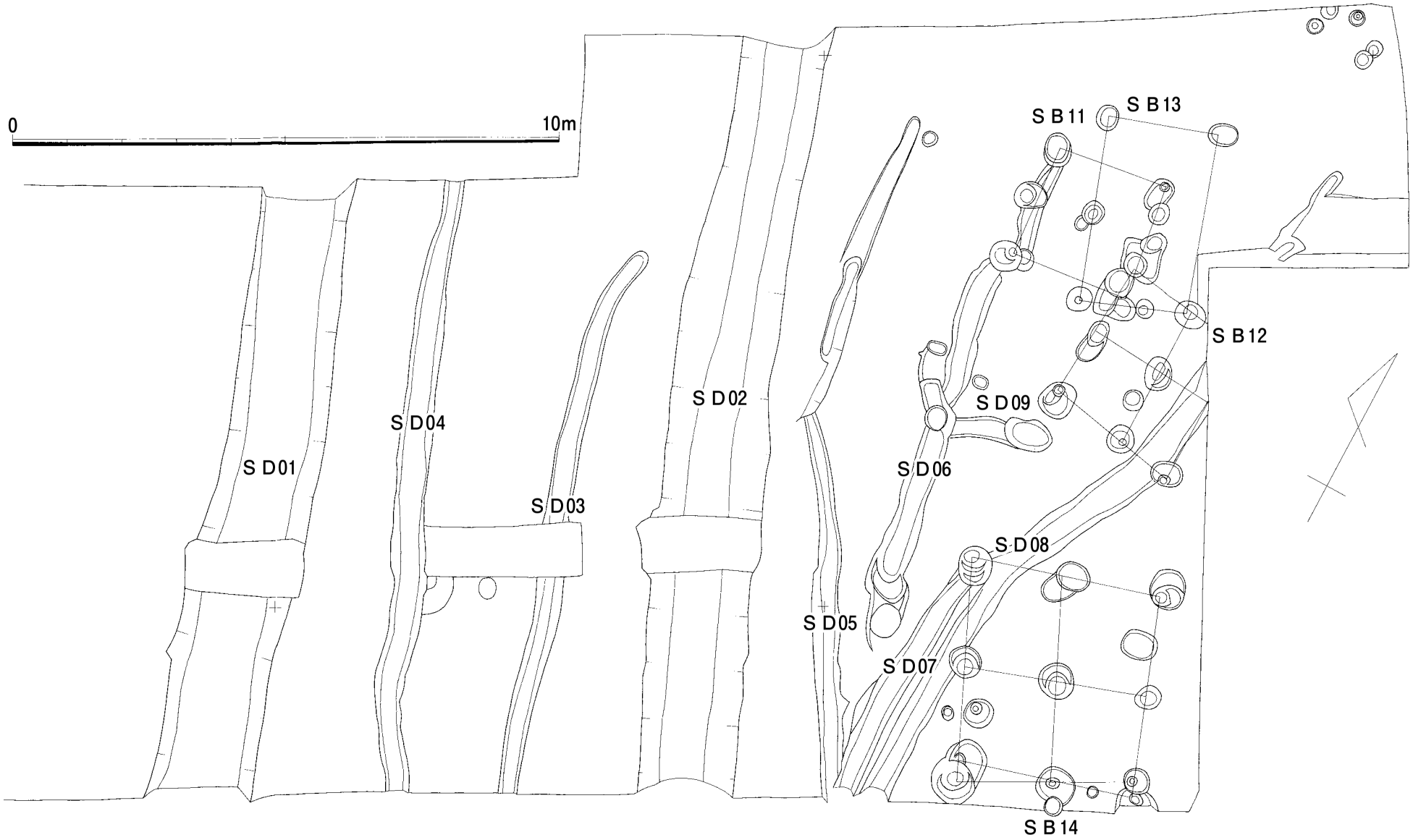
出土遺物（第９・10図）

ＳＤ01出土土器（第９図）

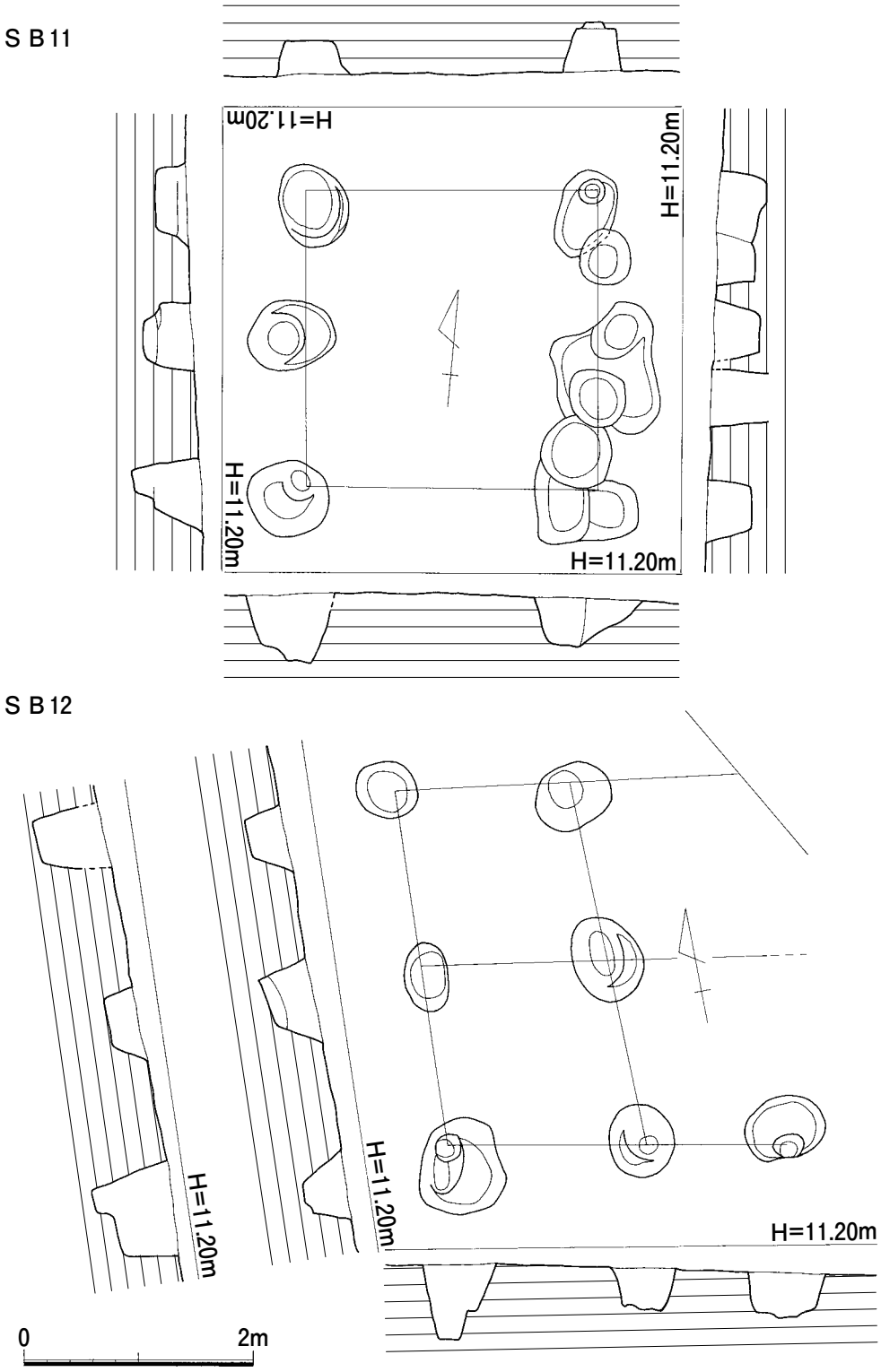
須恵器

杯蓋（１～３）天井部と口縁部の境に段や沈線はなく、丸くつくられている。口縁端部は丸くおさめられている。口径11.2～12.6cm、器高3.8～4.2cmを測る。天井部外面が回転ヘラ削り、内面はナデ、その他の部位は横ナデを施す。２の口縁部は直立気味に外に開く。１の天井部にはヘラ記号「∈」が刻まれている。

杯（４～６）４は受け部をもつ杯で、立ち上がりの高さは0.6cmを測り、短く内傾している。口径



第５図　井相田Ｃ遺跡第９次遺構配置図

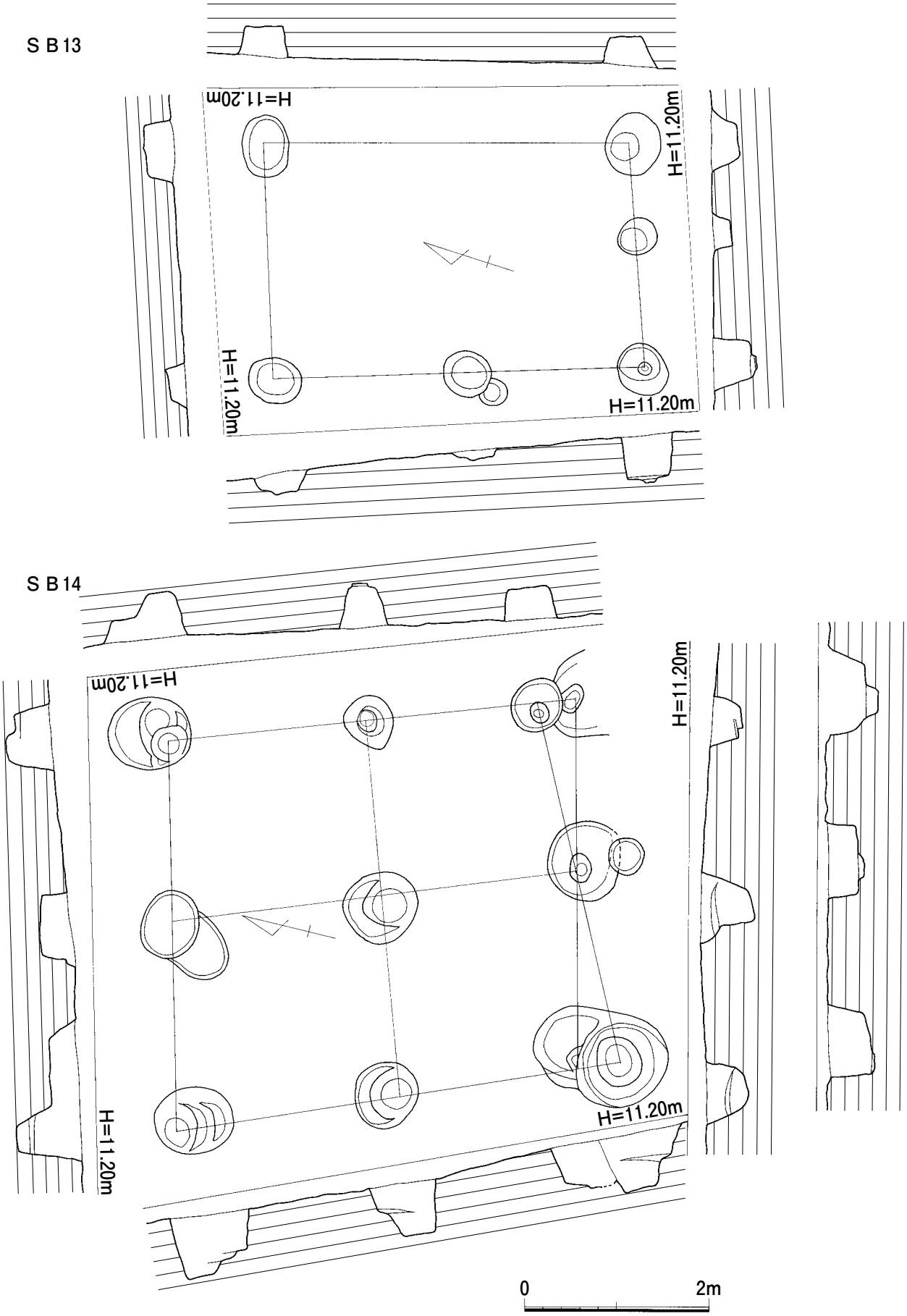


第６図　掘立柱建物実測図(1)

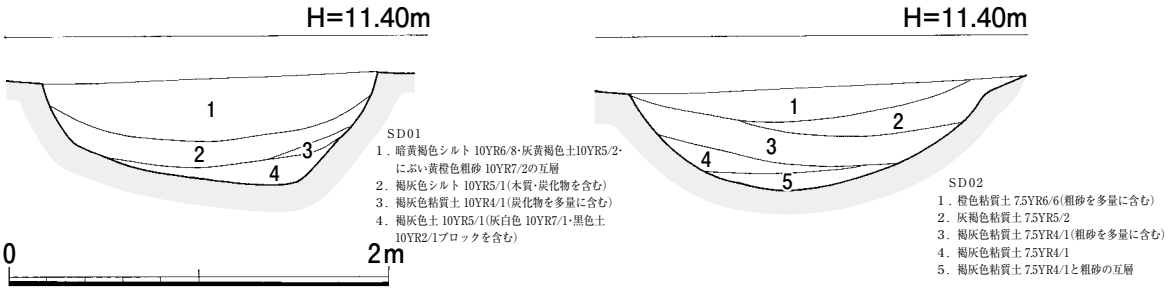
10.1cm、器高3.6cm、受け部径12.2cmを測る。５・６は体部下位に稜をもち、外上方にのびる。体部および内底部は横ナデ、外底部は平底で未調整である。

ＳＤ02出土土器（第９図）

須恵器



第７図　掘立柱建物実測図(2)



第８図　溝土層断面実測図

杯蓋（７～９）天井部と口縁部の境に段や沈線はなく、丸くつくられている。口縁端部は丸くおさめられている。口径11.6～13.2cm、器高3.5～4.0cmを測る。天井部外面が回転ヘラ削り、内面はナデ、その他の部位は横ナデを施す。８の口縁部は直立気味に外に開く。４の天井部には三日月形のヘラ記号が刻まれている。

杯（10～12） 受け部をもつ杯で、小さい受部から立ち上がり部が短く内傾している。口径9.6～11.2cm、器高2.8～4.0cm、受け部径9.6～11.4cmを測る。

有蓋高杯（13）杯部は受け部から短く内傾する立ち上がり部をもつ。口径11.1cm、受け部13.5cmを測る。筒部の中央付近には２条の平行凹線を廻らせる。

壷（14）肩部以下が残存、外面の肩部がカキ目、体部中位が回転横ナデ、下半が回転ヘラ削り、底部はヘラ削りで、W字状のヘラ記号を有す。内面は底部がナデ、その他の部位は回転横ナデを施す。

土師器

壺（15）口縁部が短く外反し、内外面とも横ナデ、体部は外面がヘラ削り、内面はヘラナデを施す。

盌（16）半球形の盌で、体部内面の中位で突出し肥厚し、口縁端部は細くおさめられやや内傾する。胎土には細かい砂粒を多量に含み、橙色を呈する。器周1/2弱からの復元口径12.0cm、器高4.6cmを測る。

甕（17～19）口縁部は緩く屈曲し、内外面とも横ナデ、体部は外面が縦方向のハケ目、内面はヘラ削りを施す。

ＳＤ05出土土器（第９図）

須恵器 杯蓋（20） 天井部と口縁部の境に段、沈線はなく、丸くつくられ、端部は丸くおさめる。

ＳＤ06出土土器（第９図）

土師器 甕（21）口縁部がくの字に屈曲し、外面から内面上位にかけて横ナデ、内面下位は横方向のヘラ削り、体部は外面が縦方向のハケ目、内面はヘラ削りを施す。

Pit出土土器（第９図）

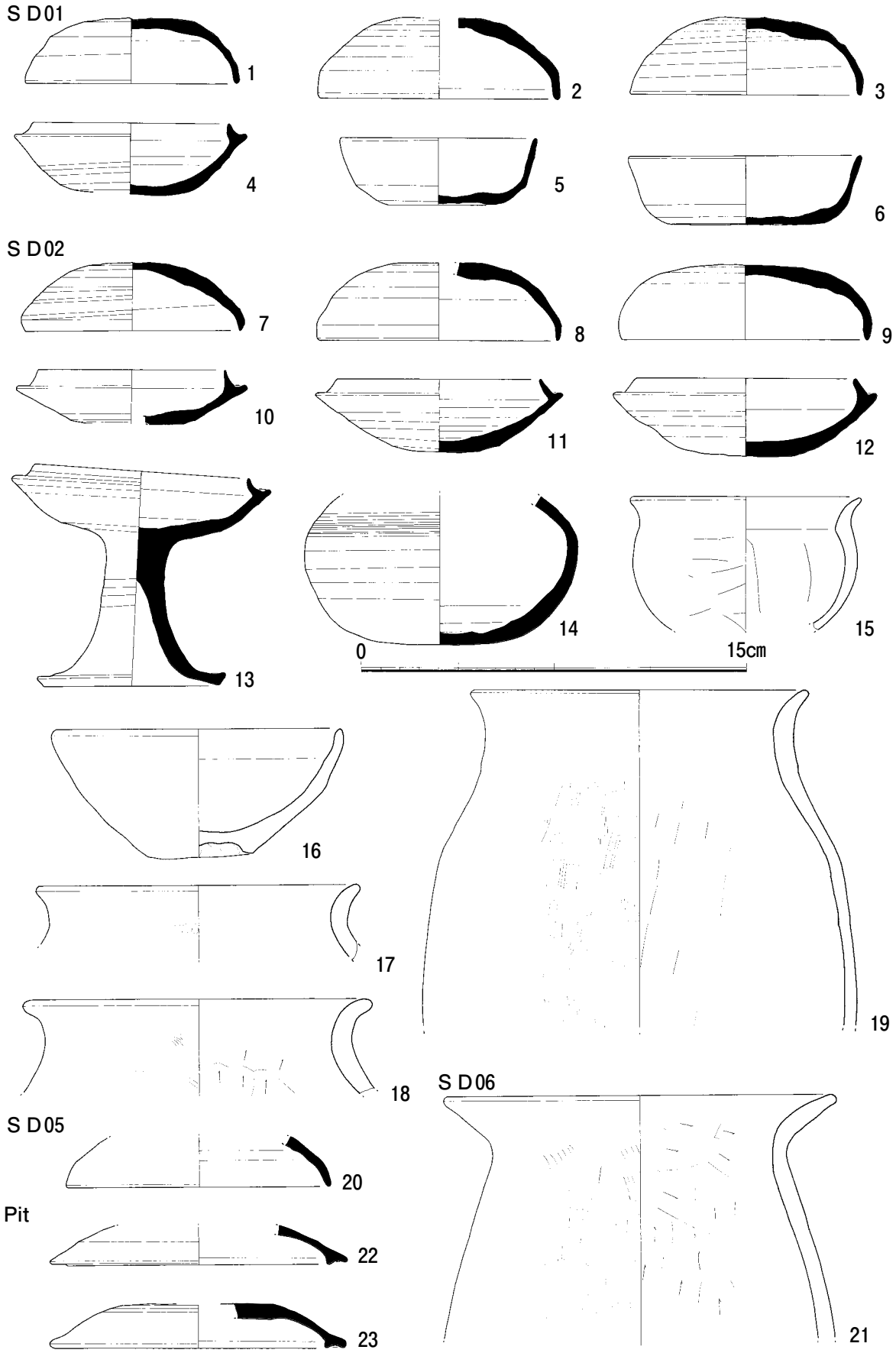
須恵器 杯蓋（22・23） 内面に見受けの短い返りをもつ。22がPit12、23はPit22からの出土。

包含層出土土器（第10図）

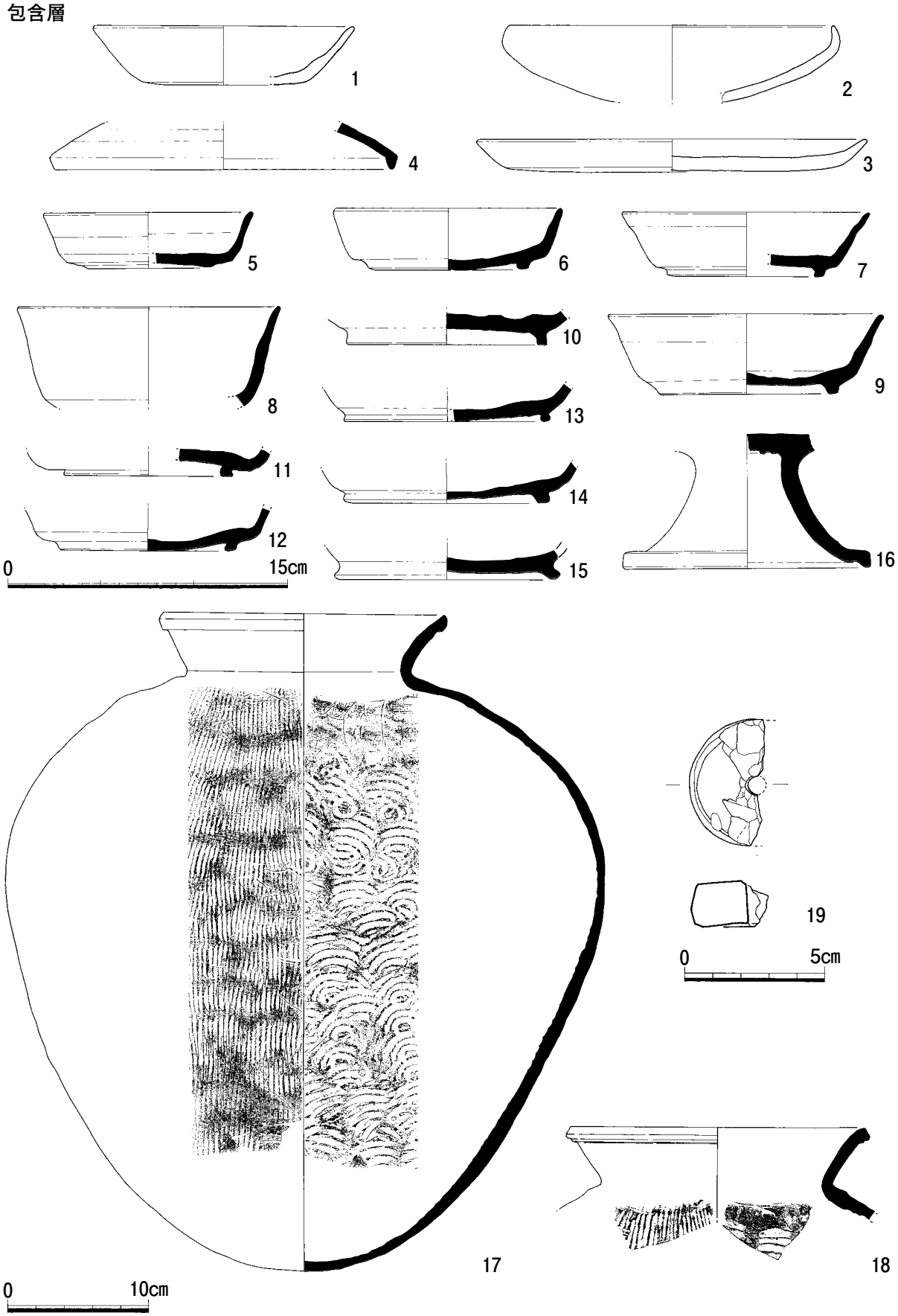
調査区の東南部を中心に遺物包含層を確認した。土層図（第４図）６層 褐灰色土（粗砂を含む マンガン、鉄分沈着）が相当する。

土師器

杯（１）底部は平坦にヘラ切り離しされ、体部はやや内湾して外上方にのびる。体部外面下位がヘラ削りされる他は、内外面とも横ナデを施した後、横方向にヘラ磨きされる。復元口径14.0cm、器高3.1cm、復元底径8.4cmを測る。


S D01
1
2
3
4
5
6
S D02
7
8
9
10
11
12
13
14
15
0
15cm
16
17
18
19
S D06
S D05
20
Pit
22
23
21

第９図　出土土器実測図



第10図　包含層出土土器、石製品実測図

鉢（２）口縁部は内湾し、端部は細くおさめられる。調整は体部が横ナデ、内底部はナデ、外底部はヘラ切り離しされる。

皿（３）復元口径20.8cm、器高1.7cm、復元底径17.4cmを測る。底部はヘラ切り離しされ、体部は内外面とも回転横ナデされる。

須恵器

杯蓋（４） 口縁部は断面三角形で内傾し、内面の退部との境は明瞭である。内面天井部がナデ、体部・口縁部は回転横ナデである。

杯（５）底部と体部の境が明瞭で稜がつく。体部はほぼ直線的にのび、口縁下でわずかに外反する。

高台杯（６～15）６～９は底部と体部の境が明瞭で稜がつく。体部がほぼ直線的にのび、７～９は口縁下でわずかに外反する。８は底端部の内側が欠失、６・７・９・10は底端部よりやや内側に断面四角の低い高台がつく。内側が接地、外側が跳ね上がる。11～15は口縁部が欠失した底部片で、13～15は外に開く低い高台がつく。

高杯（16）杯部が欠失し、脚裾端部は断面三角形を呈する。

甕（17・18）頸部が短く、口縁部は緩く外に開く。調整は口縁部が内外面とも横ナデ、体部外面が平行叩き、内面には粗い青海波の当て具痕が残る。

石製品 紡錘車（19）直径4.7cm、厚さ1.6cm、孔径0.8cmを測る。Pit05出土。

Ⅳ　小結

今までの周辺の調査成果から古墳時代後期～古代の遺構が存在することが予想されたが、調査区の西側には旧河川がかかり、今回調査された範囲は集落の辺縁部とみられる。８世紀代の遺構は検出されなかったが、遺物包含層出土の土器は周辺の集落の存在を示唆するものである。

註１　調査報告書は以下の通り刊行されている。

井相田Ｃ遺跡

「井相田Ｃ遺跡Ⅰ」　福岡市埋蔵文化財調査報告書第152集 1987

「井相田Ｃ遺跡Ⅱ」　福岡市埋蔵文化財調査報告書第179集 1988

「井相田Ｃ遺跡第５次･高畑遺跡第14次」　福岡市埋蔵文化財調査報告書第458集 1996

「井相田Ｃ第6次－井相田Ｃ遺跡第6次調査の概要－」　福岡市埋蔵文化財調査報告書第519集 1997

「井相田Ｃ遺跡5－井相田Ｃ遺跡第3次調査報告書－」　福岡市埋蔵文化財調査報告書第658集 2000

「井相田Ｃ遺跡6－井相田Ｃ遺跡第7次調査報告－」　福岡市埋蔵文化財調査報告書第975集 2008

「井相田Ｃ遺跡7－井相田Ｃ遺跡第8次調査報告－」　福岡市埋蔵文化財調査報告書第1027集 2008

仲島遺跡

「仲島遺跡Ⅰ－第2次調査報告－」　福岡市埋蔵文化財調査報告書第1037集 2009

井相田Ｄ遺跡

「井相田Ｄ遺跡 第2次調査」　福岡市埋蔵文化財調査報告書第610集 1999

「井相田Ｄ遺跡－第1･3次調査－」　福岡市埋蔵文化財調査報告書第701集 2002

図版１

１．井相田Ｃ遺跡第９次調査全景（北東から）

２．ＳＢ10完掘（南東から）

図版２

１．ＳＤ01（南から）

２．ＳＤ02（南から）

３．ＳＤ02発掘風景（北西から）

1．ＳＤ01木杭（北から）

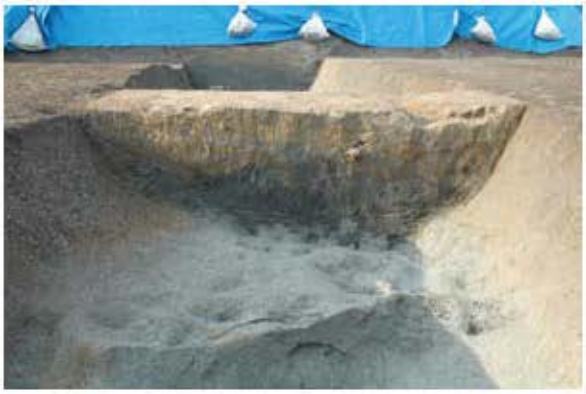
2．Pit11（東から）

3．ＳＢ11（北東から）

4．調査区北端張出部（北東から）

図版３

図版４



１．ＳＤ01土層（南から）

２．ＳＤ02土層（南から）

３．ＳＤ01土器出土状況（南から）

４．ＳＤ02土器出土状況（南から）

５．井相田Ｃ遺跡９次調査南壁面西半土層（北から）

６．井相田Ｃ遺跡9次調査南壁面西半土層（北から）

遺物写真

報告書抄録

ふりがな 書名	いそうだしーいせきはち 井相田Ｃ遺跡８
副書名	井相田Ｃ遺跡第９次調査報告
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第1178集
編著者名	佐藤一郎
編集機関	福岡市教育委員会
所在地	〒810-8621 福岡県福岡市中央区天神１-８-１　TEL 092-711-4667
発行年月日	2013年（平成25年）３月22日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
いそうだしーいせき 井相田Ｃ遺跡 （第８次調査）	ふくおかしはかたくいそうだにちょうめ 福岡市博多区井相田２丁目 ４-４・17	40130		33°39'37"	130°27'27"	110207～ 110325	536㎡	記録保存 調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
井相田Ｃ遺跡	集落	６～８世紀	掘立柱建物、溝	須恵器、土師器	

要約	井相田Ｃ遺跡第９次調査では掘立柱建物、溝を検出した。

井相田Ｃ遺跡8

－井相田Ｃ遺跡第９次調査報告－

2013年（平成25年）３月22日

発　行　福岡市教育委員会

福岡市中央区天神１丁目８番１号

印　刷　株式会社親和プロセス

福岡市南区塩原１丁目４番４号